

現代俳句と古典の滑稽

飯塚ひろし

俳諧のものは「座の文芸」で、その中核をなす「連句」は人々の共同作業により作られたものであった。詩情は座の雰囲気により、連想を生みその輪を拡げた。

通俗、卑俗から生まれた俳諧は、芭蕉の出現により一挙に精神的なポテンシャルを高め、自在な表現形式を獲得するに至った。

明治になり、正岡子規が江戸期の俳諧を月並み、陳腐なものとして排斥し、写生至上主義を唱えて「俳句」を発生せしめた。以後俳句は真面目一方となり、笑いが片隅に追いやられた。

子規を受け継いだ高濱虚子は「花鳥風月」と「写生」を唱え、多くの子弟を育てた。

滑稽俳句は真面目な俳句を多作していると自然発生するものである。始めから大笑いを狙って作句すると、大抵は失敗する。大笑いは句の品格が下がり、苦笑程度がベターである。

微苦笑俳壇や滑稽俳句協会が創設され、今まで捨てていた作品が日の目を浴びるようになり喜んだ同輩も多い。大いに俳句において滑稽を追求したいものである。

江戸期とそれ以降の滑稽俳句を取り上げて寸評を試みたい。

一つ家に遊女と寝たり萩と月 /松尾芭蕉

芭蕉は多くの紀行文を後世に遺したが「奥のほそみち」の中でも最も美しく艶めい

た作品である。襖一つを隔て遊女と寝るとの設定は、色っぽく妖しい雰囲気である。芭蕉も隣の部屋が気になり、寝苦しかったであろう。「萩と月」と二つの季語があるが、芭蕉が萩で、遊女が月と解すると可笑しみが倍増する。

夏河を越すうれしさよ手に草履 /与謝蕪村

手に草履を持って渉るので、それ程深い河ではない。「うれしさよ」と云うから、尻端折りで膝を濡らす程度の河越し風景である。蕪村らしい洒脱で傍観的態度の俳句である。ただ、河を越すだけの事だが、蕪村の余りの喜びようが可笑しみを増す。尻端折りの格好も笑いを誘う。

うかれ猫奇妙に焦げて参りけり /小林一茶

発情期の猫がしばらく家にも戻らない。やっと戻って来たと思ったら、毛のあちこちが焦げていた。何処で何をしていたか全く分からない気持ちを「奇妙に」と詠んだ。発情した雄猫の憐れな生態を想像すると、可笑しくもあり滑稽でもある。

いくたびも雪の深さを尋ねけり /正岡子規

朝から降り続く雪。かなりの積雪に見舞われた。病臥の子規は介護の妹に、いくども積雪量を尋ね、その都度合点するが、直ぐに窓外が気になって仕方がない。身動き

ならぬ子規が雪の深さを聞いた安堵感と、漠然とした病状への不安とが交錯した心境がよく詠出された句である。しかし、子供のように幾度も積雪量を尋ねる子規が、可笑しくもあり哀れでもある。

大寒の埃の如く人死ぬる /高濱虚子

人間の生き死には大宇宙の輪廻。悠久の歳月のながれに比べると、それは微小な埃のようなものである。いささか残酷な感じの詠みっぷりだが、季語「大寒」の性格を最も的確に捉えた作品と云える。大寒を配するとブラック・ユーモアとなり、苦笑せざるを得ない。

金輪際牛の笑わぬ冬日かな /飯田蛇笏

孤高な俳人・蛇笏にしては飄逸な作品。馬は笑うやうな表情を見せるが、牛は笑わない。

冬日を捉えて、「金輪際笑わぬ牛」と蛇笏に詠まれると、微苦笑を禁じえない。牛の顔をじっと観察している作者が滑稽でもある。

青蛙おのれもペンキ塗りたてか /芥川龍之介

蛙の姿や生態を直裁に表現し「ペンキ塗りたてか」の描写は龍之介の特色である。機智やユーモアや鋭い感覚の冴えが窺える。ペンキ塗りたての生々しい表現は口語のものである。明るい可笑しみが滲み出るところが絶妙である。

くちびるを先立て来たり遠泳子 /能村登四郎

遠泳の子供たちが生々しく描写されている。「くちびるを先立て」とは面白く独創的な措辞である。遠泳子が口で大息をしている様子がユーモラスに表出された。夢中で泳いだ夜、
床に入ると肌の潮焼けが痛くて眠れない。このような滑稽は何処にでもあるが、それを発見するか否かが日頃の研鑽に掛かっている。

外にも出よ触るるばかりに春の月 /中村汀女

「外にも出よ」と大胆な命令形が、大きな春の月を観たときの、汀女の響きと感動をよく伝えている。しかし、大真面目な命令形には驚きと可笑しみが同居する。「触るるばかりに」は巧みな比喻表現である。

せつせつと眼まで濡らして髪洗ふ /野澤節子

沈潜された「かなしみ」が節子の生きる力。その底流には、憤りや諦観が渦巻いている。この句の眼目は「せつせつと」にあり、髪を「いとおしむ」女性の心が巧く表出された。

「眼まで濡らして」女性が髪を洗う心情は、傍目には滑稽とも思える。

争うて引きたる田水落しけり /菅野忠雄

農耕民族の性と機微を巧みに詠んだ、諧のある面白い作品である。農業用水に絡んだ争いは絶えないが、苦勞して取水した田水も、稲刈りが近づけば落とすことになる。人間の愚かさと大自然の悠久な営みとの落差を考えさせられる。諧とペーソス（哀愁）のある滑稽俳句である。

古今の滑稽俳句を列挙してみた。此れらの俳句は、笑いを狙って作句されたものではなく、自然発生したものである。滑稽俳句にあっても、俳句である以上格調の高さを必要とする。大笑いや駄洒落などは俳句の品格を下げるので慎みたい。

先にも述べたが、笑いは多作の中に自然発生するのがベターである。単に可笑しさだけでなく、笑いの裏にペーソスがあるのが最上であろう。古今の名句にも触れて、我々は滑稽を追及、研鑽をしたいものである。